

聖書：ピリピ人への手紙1章27～30節

説教題：信仰と苦しみ

1 キリストの福音にふさわしい生活とは
27節に「ただ一つ。キリストの福音にふさわしく生活しなさい」とあります。ピリピの教会に向けて語られたパウロのことは、私たちにも同じように語られています。

いったい「キリストの福音にふさわしい生活」とはなんなのでしょう。まずそこから考えます。まず最初に思い浮かぶのは、主が語った戒めです。あなたの神を愛しなさい。そして、自分を愛するように隣人を愛しなさい。この二つのことを日々の生活の中で実践していく。それがキリストの福音にふさわしい生活ということでしょうか。

確かにそうでしょう。でも実際はどうでしょう。主が言われた二つの戒めをきちんと守っていると、自信をもって言えるでしょうか。多くの方は難しい、できないと感じて悩んでいるのではないですか。そうすると、パウロはできもしないようなことを、守るようと強く命令したということになります。もちろんそんなはずはありません。では、どうということなのか。今日はその所を見ていきます。

2 ねたみ

そもそもパウロは、どんなことを頭に描きながら「キリストの福音にふさわしい生活」と言ったのか。正しく理解するためには、まずそこから考える必要があります。

前回のところで触れましたが、パウロは裁判を受けるために囚人としてローマに連れ

て来られました。そのことがきっかけとなって、思いがけなくローマの高い身分の人たちと接触する機会が与えられました。パウロがどうして裁判にかけられようとしているのか。どうして遠くエルサレムからわざわざ囚人として送られてきたのか。人に説明するために、どうしてもパウロの信仰のことを語らないわけにはいきません。身分の高い人たちの前で、自分が主イエスキリストを宣べ伝えている者であることを証しすることになりました。そのことをパウロは手紙の中で「私の身に起こったことがかえって福音を前進させることになった」と表現しています。

今まで、ローマ在住のクリスチャンたちがどんなに願っても難しかったことを、よそからやって来たパウロが易々とやってしまったのです。もちろん多くのクリスチャンは素直に喜びました。しかしなかには、パウロをねたみ、厳しく攻撃する人たちがいました。これを聞いて、「クリスチャンなのにどうして？」と皆さんは思うでしょう。人間の心は複雑です。いつの時代でも同じことが繰り返されていきます。

パウロはピリピの人たちに心配をかけまいと、あまり悲観的なことは書かないように配慮します。それでも、「彼らは、投獄されている私をさらに苦しめるつもりなのです」とぼろりと本音を漏らしています。それほど苦しかったようです。

ですからパウロは思うのです。こんなことをピリピの教会で絶対に繰り返して欲しく

ない。それでこう言うのです。「キリストの福音にふさわしい生活をしなさい。」どちらが偉いか、どちらがすぐれているのかという競争心、党派心。それらは純真な動機から出たものではありません。人の心の奥底に隠れている「ねたみ」という思いから出て来るものです。あなたがたは、そうではならないようキリストの福音にふさわしく生活しなさいと勧めます。

3 へりくだる

では具体的にどうすることなのか。そのことは、実は2章3節に出て来ます。「何事も自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれたものと思いなさい。」ねたみ反対はへりくだり。互いに人を自分よりもすぐれたものと思うこと。確かに言われてみればそのとおりです。これが、「キリストの福音にふさわしく生活」ということの中身です。

でも、どうですか。ねたみではなく、へりくだり、互いに人を自分よりもすぐれたものと思う。頭ではわかります。そうすべきだということも納得できます。でも先ほど言いました。これが簡単にできるならだれも苦労しない。できないからつらい。これが皆さんの本音です。

人をねたむ心は自分を苦しめます。苦しみから逃れるためにいろいろな理屈を考え出します。例えばこんなふうです。「あの人たちが高価な車を買うなんて、なんと贅沢な人たちだろうか。あんなにお金を使って、きっと後で困るに違いない。」自分の心の中に、ねたみがあることを絶対に認めたくありません。自分はいつまでも良い人で、悪いのは贅沢をしている人たちに決まっている。こ

んなふうを考えるのが、私たちの現実です。そうやって、罪の上に罪を重ねているのです。

4 信仰と苦しみ

1) キリストの信仰

いったいどうしたらいいのでしょうか。鍵は、次のことばにあります。29節。「あなたがたは、キリストのために、キリストを信じる信仰だけでなく、キリストのために苦しみをも賜ったのです。」

このことばには、信仰と苦しみと二つのことが含まれています。

まず信仰のことから。私たちはあるときキリストに出会い、キリストを主と信じ、この方に罪を告白して救いをいただきました。かつて神などいない。神を信じる者は弱い人たちなのだと言っていた自分が、あるとき主を受け入れたのですから、確かにこれは不思議なことです。自分の能力や努力で主を信じたとは到底言えません。こんな罪人が主を信じることができた。これはもう奇蹟と言ってよいほどのことです。ですから29節の前半のことばは、よく納得できます。

しかし二つ目のことはどうでしょうか。「キリストのために苦しみをも賜ったのです。」そんなこと聞いていませんと言う方がいるでしょうか。後悔したでしょうか。半分冗談で半分まじめに言いますが、後悔してももう手遅れです。みなさんにはキリストのための苦しみも与えられております。

2) キリストの苦しみ

心が暗くなったでしょうか。でも実は、こんなこと言われなくても、すでに皆さんは毎日の生活の中で経験してきているわけです。このことに関して、牧師の私に対して苦情が

来てもおかしくないくらいです。どんな苦情か。「牧師に勧められてクリスチャンになったけれど、かえって苦しみばかりが増えた。私はあなたにだまされた。」幸いなことに、今までそういう方はおりませんでした。

試練のさなかにあるときは、苦しくて苦しくて、早く何とか解決してもらいたいときます。泣いたり叫んだり、七転八倒です。どうして神は私をこんなにも苦しめるのですかと訴えたくになります。他の人たちは幸せそうに暮らしているを見て、なぜ私だけが、と不公平感を覚えます。

私たちだけではありません。聖書に登場する多くの信仰者たちも苦しみました。ダビデは詩篇 89 篇 46 節のなかでこう呼びました。

「いつまでですか。主よ。あなたがどこまでも身を隠し、あなたの憤りが火のように燃えるのは。」

それなのに、どうしてダビデは信仰を捨てなかったのでしょうか。みなさんもなぜ信仰を捨てずに今日まで歩んできたのでしょうか。

もし、今私たちが出会う苦しみが永遠に続くということなら、どうだったでしょうか。もし、私たちの出会う苦しみが、だれも出会ったことのないもので、だれも解決の道を知らないというのなら、どうなっていたでしょうか。信じる人たちはだれもいなかったでしょう。

苦しみに出会っても、信仰を捨てないのはなぜか。第一コリント 10 章 13 節にこうあるからです。「あなたがたの会った試練はみな人の知らないものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを 耐えられないほどの試練に会わせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱

出の道も備えてくださいます。」

苦しみが襲ってきても、それは永遠に続くのではないと信じられるから。自分が今味わっている苦しみは、自分だけではない。他の人たちも同じ苦しみを味わったことがある。それを知っているから。いったいだれが私と同じ苦しみを味わってくださったのか。なんと、それは主イエス・キリストであった。

あの方は、苦しみの道を通られました。真つ暗にしか思えない苦しみの中にも救いの道が確実にあることを、主が十字架の上で示してくださった。私たちはそれを知っています。だから私たちは、苦しみがあっても信仰を捨てない。いや、ますます主よ助けてくださいと、主に祈らされていく。苦しみをとおして、主の十字架のそばに近づいていきます。

私たちの心の内には、ねたみやいろいろな良くない思いがあるとしました。そのことが自分を苦しめます。そんな悪い心を捨てて、もっと良いクリスチャンになりたい、だれもが願います。そのためには、どうしたら良いのですか、と時々聞かれます。残念ながら、手軽な方法はありません。

でも一つだけ言えることがあります。自分の中に人をねたむ心や良くない心があることに気がついたとき、みなさんどうしますか。まず、否定しようとするはずです。私は悪くないと正当化したくなるはずです。どうしてか。苦しみたくないからです。逃げたほうが楽に感じるからです。

でも主は私たちに苦しみも賜りました。いつまでも逃げればかりいられません。自分の心の中の良くない思いと向き合うしかありません。そうやって、主が通られた道歩んでいます。主がどこにおられるのか最初は見

えません。でもじょじょに見えてくるときがあります。そのとき初めて、主の恵みと愛を深く覚えさせられていきます。こんな私のためにも、主は先だって苦しんでくださっていた。主の愛がはっきりと感じられていきます。

苦しみの中を通らされるととき、私たちの信仰は、まるで火で精錬される金属のように、不純物を取り除かれ、純金のように輝いていく。そのようにして、私たちはへりくだる者へと変えられていきます。

苦しみの中で、主の愛を深く覚えさせていただきたいと願います。